様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　６月　２日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７２００４８
研究課題名（和文）　江戸時代中期における室町水墨画の位置：池大雅を中心に

研究課題名（英文）　The Role of Muromachi Ink Painting in Mid-Edo Period Japan: Focusing on Ike Taiga

研究代表者
濱住　真有（HAMASUMI MAYU）
大阪大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：９０３４８８９７

研究成果の概要（和文）：これまで、江戸時代に行なわれた文人画における明清絵画の影響は、さまざまな形で語られてきたが、実は日本の文人画家たちが一見、否定していたかのようにも見える室町時代の水墨画も、その作画の一規範と成り得ていた。本研究はこれを、18 世紀の京都で活躍した画家、池大雅（1723－1776）の作品を中心に、同時代のいわゆる漢画系諸派（雲谷派など）の動向も視野に入れながら、日本近世絵画史における中国の影響を立体的に考察するものである。

研究成果の概要（英文）：The influence of Chinese Ming and Qing dynasties paintings on Edo period literati painters has been discussed in various contexts, and while at first glance seemingly rejected by Japanese literati painters, in fact Muromachi ink painting served as a model in their own painting. Focusing on the works of the 18th century Kyoto literati painter Ike Taiga (1723-1776) and including in its purview the various *kanga* (Chinese-style) lineages of the day such as the Unkoku School, this study presents a multifaceted consideration of Chinese influence on the history of Japanese pre-modern painting.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学　美学・美術史
キーワード：池大雅、室町水墨画、文人画

１．研究開始当初の背景

江戸時代中期に日本の文人画を大成させたといわれる池大雅や与謝蕪村（1716-1783）の、それまでにはない画の新しさとして見いだされる一つの重要な点は、山容の表現について指摘できるように、それまでの鋭い切り口を見せる山肌・岩肌の表現、つまり斧劈皴に対して、麻の繊維をほぐしたような、やわらかな山肌・岩肌の表現である披麻皴への変化であったといえる。申請者はこれまで、池大雅に関しては、画を通じた松前藩士との交流について（濱住真有、「〔研究ノート〕池大

雅と『豹關先生』－北方からの訪問者－」、実践美学美術史学会『実践女子大学美學美術史學』第 15 号、pp. 101-111、2000 年)、明末清初の杭州・西湖周辺で活躍した画家・藍瑛もしくはその一門らの描いた山水画の受容の一例について（濱住真有、「中国山水画受容の一様相―池大雅筆『白雲紅樹図』をめぐって」、美術史学会『美術史』第 156 冊、pp. 394-412、2004 年、※2005 年度「第 3 回美術史学会『美術史』論文賞」受賞)、大雅における「写意」の認識をめぐって（濱住真有、「江戸時代における中国絵画受容の問題―池大雅の款記に見られる「写意」をめぐって―」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢（美学篇)』pp. 1-27、2010 年)、大雅の妻・玉瀾については、その作画における、夫・大雅からの具体的な図様の借用例について（濱住真有、「池玉瀾研究―『柳陰呼舟』の図様を中心に―」、『鹿島美術研究』年報 23 号別冊、pp. 211-221、2006 年）言及してきた。これらの研究の過程で、大雅が、必ずしもそのすべての作品に披麻皴を使っているのではなく、今日知られる「西湖春景・銭塘観潮図屏風」（東京国立博物館蔵）や「瀟湘勝概図屏風」(個人蔵）などの複数の作例において、日本の文人画が行われる以前の、室町水墨画に見出されるような斧劈皴が見られることに、関心を持った。

大雅 27 歳若描きの「赤壁両遊図屏風」（個人蔵）には、周文ら室町水墨画との関連が指摘されており（吉沢忠氏作品解説『池大雅画譜』、中央公論美術出版、1959 年)、大雅 40 代後半の作と考えられている「柳下童子図屏風」（京都府蔵）において、大雅自ら「擬如拙道人筆（如拙道人の筆に擬す)」と記して、室町時代の相国寺の画僧・如拙の「瓢鮎図」(妙心寺退蔵院蔵)を意識して描いていると理解されることを考慮すれば、室町水墨画が若描きから大成期に至るまで大雅の作画上の一つの規範としてあり続けたことが推察される。大雅が京都で活躍した当時の日本では、山口の雲谷派、江戸の桜井雪館など室町水墨画を代表する雪舟を引き継ぐ画派があり、他方、京都の曽我蕭白（1730-1781）は、室町後期に大徳寺真珠庵の襖絵を描いた曽我蛇足の継承者を自ら名乗っていた。一方、そうした中、室町水墨画を掲載する版本も出版されていた。申請者は、そのような同時代の室町水墨画をめぐる状況を理解した上で、大雅における室町水墨画の果たした役割、位置を具体的に検証したいと考えるに至った。

2007 年には、アメリカのフィラデルフィア美術館で大規模な池大雅・玉瀾夫妻の展覧会が行なわれ、大雅の主要な現存作品の実態とこれまでの研究状況が網羅的に示された。本研究は先行研究の成果を踏まえ、かつ新しい研究動向にも目を向けながら進めることを目指した。

２．研究の目的

当研究は、池大雅における室町水墨画受容の実態と全体の作画活動におけるその意義、考察の前提ともなる室町水墨画に対する同時代の認識と出版状況などの文化的背景の把握に努め、江戸時代中期の、池大雅における室町水墨画の位置を明らかにすることを目的とする。

具体的な検討課題としては、以下の 3 点を挙げることができる。

（１）室町水墨画との関係が見受けられる池大雅作品の検討・分析。「赤壁両遊図屏風」(個人蔵)、「柳下童子図屏風」（京都府蔵）など。

（２）池大雅と同時代の室町水墨画をめぐる状況と漢画系諸派の動向の把握。

（３）江戸時代の版本に掲載される室町水墨画、画論における室町水墨画に関する記述の検討。

３．研究の方法

江戸時代中期における室町水墨画の位置を明らかにしようとする本研究では、特に大雅作品との影響関係が指摘できるような室町水墨画については、具体的にその関連する内容を説明し、大雅の画業におけるその意義を明らかにする必要がある。また、江戸時代に出版された版本に掲載される室町水墨画の図様の情報、江戸時代の画論における室町水墨画に対する発言や記述についての検討・分析が求められる。池大雅を主体とする本研究においては、大雅が実際に見た可能性がある寺社の襖絵などを具体的に想定する必要もあるだろう。年度ごと、以下のような研究の方法により、考察を進めた。

【2011 年度】

初年度は、江戸時代中期の文人画における室町水墨画の位置について、江戸時代の版本に掲載された室町水墨画を収集し、また江戸時代の画論における室町水墨画に対する記述も抽出することで、同時代の室町水墨画をめぐる状況の把握に努めた。大雅作品については、吉沢忠氏によって、明兆・周文など室町時代初期の水墨画を学んだ跡がみられることが指摘されている大雅数え年 27 歳若描きの「赤壁両遊図屏風」に重点を置きながら、大雅の「赤壁」を主題とした複数の作品の年代的変遷について分析を行なうことで、室町水墨画が大雅の画業においてどのような役割を果たしていたのかについて検討を加え

ることにした。

（１）作品研究「赤壁両遊図屏風」
北宋の文人蘇軾は二度にわたって赤壁に舟遊してその度に賦を草した。この賦に基づく画題が赤壁図である。本図は、寛延 2 年（1749）大雅数え年 27 歳の作で、室町水墨画との関わりが指摘されているが未だ詳細な検討は行われていない。大雅がこの画題を描く早い例は、23 歳の「赤壁後遊図」（個人蔵）であり、26 歳の時にも「赤壁舟遊図」（個人蔵）を描き、以後、この画題で複数の作品を生み出している。室町水墨画との比較による本図の分析と、これら大雅の赤壁の画題における位置づけについて検討した。

（２）江戸時代の版本における室町水墨画についての研究
池大雅筆「柳下童子図屏風」は、如拙筆「瓢鮎図」を踏まえていると考えられる作品である。ここで問題となるのが、大雅が直接妙心寺退蔵院で「瓢鮎図」を実見した上で描かれた作品であるか否かということである。江戸時代中期の狩野派の絵師・大岡春卜の著した『画巧潜覧』（元文 4 年・1740 年）では、如拙筆「瓢鮎図」を掲載しており、本図が生み出される背景にこのような版本の挿図が関与している可能性も大いに想定されることから、室町時代の水墨画を掲載する江戸時代の版本について把握に努め（例えば、室町水墨画を収録する版本として他に、大岡春卜の『画品』『画本手鑑』など）、また画論における室町水墨画に関する記述について検討した。

（３）調査・見学
池大雅を中心とした日本の文人画のうち、室町水墨画に関わると思われるもの、大雅と同時代の漢画系諸派の作品、室町水墨画に関するものについて、国内外の作品の調査、見学を行なうことにした。

【2012 年度】
最終年度となる第 2 年次も前年度に引き続き、江戸時代中期における室町水墨画の位置について、江戸時代の版本に掲載された室町水墨画を拾い、また江戸時代の画論における室町水墨画に対する記述とその傾向について分析を加えながら、その実態の把握に努めた。大雅作品については、大雅自ら款記に「擬如拙道人筆（如拙道人の筆に擬す）」と記し、如拙筆「瓢鮎図」を踏まえたと考えられる「柳下童子図屏風」に重点を置いて研究を進める一方で、27 歳の若描きから最晩年の傑作といわれる扇面画帖「東山清音帖」に行き着くまで描かれた「瀟湘八景」という室町水墨画を代表する画題にも注目しながら研究を行なうことにした。

（１）作品研究
①「柳下童子図屏風」
本図については、野口氏が作品論を発表している（野口剛「≪如拙道人の筆に擬す≫とはこれ如何―池大雅筆「柳下童子図屏風」序説」『美術史家大いに笑う―河野元昭先生のための日本美術論集―』ブリュッケ、2006 年）。氏の指摘するように、「如拙道人の筆に擬」したと大雅自らが記す本図には、浮世絵における「見立て」や江戸時代の絵画や文芸における「やつし」に近い感覚があるかもしれない。当研究では、室町水墨画との関わりから、新たな作品解釈の可能性を提示する。

②「瀟湘八景図」の研究
瀟江と湘江が交わり注ぐ、洞庭湖周辺の名勝地八場面を描く瀟湘八景の画題は、北宋の宋迪に始まるとされ、日本には牧谿、玉澗の図巻が伝来し、室町時代以降盛んに描かれた。江戸時代には、狩野派の絵師がこの画題を描いているが、次第に近江八景のような日本の各名勝に置き換えられて、もはや流行らない画題となる中、大雅は 27 歳の「瀟湘八景図巻」（焼失）以来この画題を描き続けて、最晩年の「東山清音帖」に至っている。室町水墨画と池大雅の作品との関わりをテーマとする本研究においては、室町水墨画を代表する瀟湘八景の画題が、文人画を志す大雅において、生涯にわたって描かれたことを無視することはできない。室町水墨画との具体的な比較作業を行ないつつ、大雅の画業全体におけるこの画題の意義について検討した。

（２）江戸時代の版本における室町水墨画についての研究
前年度に引き続き、江戸時代の版本における室町水墨画を収集し、また画論における室町水墨画に関する記述について検討し、同時代の室町水墨画をめぐる状況の把握に努めた。

（３）調査・見学
池大雅を中心とした日本の文人画のうち、室町水墨画に関わると思われるもの、大雅と同時代の漢画系諸派の作品、室町水墨画に関するものなど、国内の作品の調査、見学を行なうことにした。

４．研究成果
本研究は、江戸時代中期において、如拙、周文らに代表される室町時代の水墨画がどのように理解されていたのかについて、作画上の具体的な問題として、これを解明しよう

とするものであった。これまで、江戸時代に行なわれた文人画における明清絵画の影響は、さまざまな形で語られてきたが、実は日本の文人画家たちが一見、否定していたかのようにも見える室町時代の水墨画も、その作画において一規範と成り得ていた。本研究は、これを江戸時代の文人画を代表する画家で、江戸時代中期にあたる 18 世紀の京都で活躍した画家、池大雅（1723－1776）の作品を中心に考察しようとするものである。平成 23（2011）年度、平成 24（2012）年度ともに、室町水墨画との関連が見受けられる池大雅作品の調査及び見学、また室町水墨画の調査及び見学、江戸時代の版本に見られる室町水墨画の調査を実施し、池大雅作品における室町水墨画の影響について考察した。

大雅の室町水墨画の受容の背景には、黄檗山萬福寺、臨済宗の白隠慧鶴（1685－1768）、大典顕常（1719－1801）との関わりが知られるように、室町時代と江戸時代、室町水墨画と池大雅を結び得る、「禅宗」が大きな役割を果たしていることが強く認識された。とりわけ白隠およびその門下の関連寺院や、白隠の禅画との関わりなど、明らかにすべき課題が多い。なお、個々の作品研究の成果の一端として、下記２件を挙げておく。

（１）池大雅筆「赤壁両遊図屏風」について

従来の研究では、例えば吉沢忠氏によって周文ら室町水墨画の学習が指摘されることがあっても、具体的な作品の比較検討は行なわれることがなかったが、本研究では、参照されたであろう伝周文筆山水図屏風を具体的に想定し、「赤壁両遊図屏風」における室町水墨画との関連性についての実態と、大雅の赤壁図の作例及び画業全体の中でこの屏風がどのような役割を果たしていたのかについて、明らかにする。

（２）池大雅筆「柳下童子図」について

如拙筆「瓢鮎図」では瓢箪で鯰を押さえようとする男が描かれるのに対し、池大雅の「柳下童子図屏風」では童子が橋の上から素手で小魚やエビをとろうとする図に改変していることについては、浮世絵における「見立て」や江戸時代の絵画や文芸における「やつし」に近いことが指摘されている（野口、2006 年）。これに対し、本研究では、橋の上から水に手を伸ばす童子に、室町水墨画の代表的な画題とその図様が重層的に重ねられている可能性があること、また本図の「筆使い」や「彩色」を手掛かりとして、新たな作品解釈の可能性があることに言及する。

なお、本研究は、大雅と同時代のいわゆる漢画系諸派（雲谷派など）の動向も視野に入れながら、江戸時代における室町水墨画の意味を問い直すことで、日本近世絵画史における中国の影響を立体的に考察しようとするものである。本研究の研究成果は、江戸時代の文人画研究において研究の進展に貢献できるものと思われる。ただし、江戸時代の文人画研究、日本近世絵画史研究のみにおける成果ではなく、美術史の他の分野としては日本中世絵画史、室町水墨画研究方面とも共有し得るものであり、将来的には、本研究の成果を踏まえて、美術史学の分野内にとどまらず、文化史研究の方面など、学際的な研究に進展し得るものと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

（１）飯倉洋一・濱住真有、「中井履軒・上田秋成合賛「鶉図」について」、『懐徳堂研究』3 号、査読有、2012、pp3－15

〔学会発表〕（計１件）

①濱住真有、「中井履軒・上田秋成合賛「鶉図」について」、懐徳堂アーカイブ講座（大阪大学懐徳堂記念会主催）（招待講演）、大阪大学付属図書館、2011.11.29

６．研究組織

(1)研究代表者

濱住　真有（HAMASUMI　MAYU）
大阪大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：９０３４８８９７